

第2章 被災からの復旧の取組事例

第2節 2016年熊本地震（大学における福祉的配慮をした避難所運営）

減災型社会を作るために何ができるか？ タイ、東北、熊本からの学び

元熊本学園大学 吉村千恵

この原稿は、2017年2月17日（防災勉強会、国立障害者リハビリテーションセンター研究所）、2017年11月13日（Academic Workshop: Disaster & Crisis, IASSIDD 4th Asia Pacific Regional Congress, Bangkok, Thailand）、11月16日（Workshop for Disaster-inclusive Disaster Risk Reduction at Special Elementary Schools、タイ教育省）の講演記録から編集しました。



図1 著者、吉村千恵

1 自己紹介

吉村：平成25年から28年に熊本県の4大学（熊本大学、熊本県立大学、熊本学園大学、熊本保健科学大学）が連携して、減災型地域社会リーダー養成プロジェクトを実施しました。私は熊本学園大学の講師として、このプロジェクトに参加しました。平成28年4月に「今年度で、いったん終わりだな」と思っていたらドーンと4月に地震が起きまして。いろんな意味でこの4年間のプロジェクトの成果を確認することになりました。ただ、私たち自身は、災害が専門家ではありません。

私の専門は「タイの障害者」です。ヒューマンネットワーク熊本という自立生活センターが1991年に立ち上がって、私は学生として1995年に関わったのがはじめです。東日本大震災のちょっと前にタイで大洪水があったんです。ひどいところは6カ月くらい水に浸かりました。6カ月水に浸かるというのは、想像つかないかもしれません。私はたまたまタイの障害者の研究をしていたもので、洪水で障害者はどうなっているのだろうと調べたのがきっかけです。障害と災害はとても深い関係があると思って、そこから少し関心があって勉

強をしていたところに、熊本学園大学のプロジェクトに採用されました。今日は、熊本地震を経験した後どう思うかということについてお話ができたかなと思います。

1, 自己紹介

- ・ 1995年 熊本学園大学入学 ヒューマンネットワーク熊本に「弟子入り」
- ・ 同年 夏休み 初めてタイ農村へスタディーツアー
- ・ 1996年 アメリカのバークレーで法律をテコにした障害者運動の展開について CILのファンドレイジング、運営などについての研修についていく
- ・ 1999年 タイの障害者と出会う



図2 左：タイの高架鉄道にエレベーターをつける前の階段で車いすを持ち上げる場所、中：高架ホーム上、右：設置されたエレベーター

まず、自己紹介です（図2）。1995年に初めて障害のある人に出会いました。ずっと障害者のボランティアがしたかったんですけども、大学に入ってやっと実現しました。一方で、タイの農村に行きました。これが、私が、タイの障害者について研究をはじめたきっかけになります。なんでタイかという話をしたら、明日の朝になってしまうかもしれないので、ここはちょっと省かせていただきます。

1996年にアメリカ カリフォルニア州のバークレーに6週間、東俊裕さんという車いすの弁護士と一緒に行って、法律を使った権利擁護の勉強をしました（図3）。1999年にタイの障害者と出会ったら、アメリカや日本ととても違うのに驚きました。日本の障害者とアメリカの障害者は、私にとって当事者性の主張をする「戦う障害者」というイメージがすごく強かったです。がんがん街に出て行って。当時まだ、支援費制度すら始まってなくて、全身性の重度障害者がどう町の中で暮らしていくかみたいな戦いを繰り返している日々だった。そのときに、1999年にタイの障害者と出会ったら、戦う障害者がほとんどいなかったんです。みんな農村の高床式の下でのんびり暮らしていて、日本みたいに隠されて生きているわけではなく、のんびり暮らしているように見えて、溶け込んでいるように見えて。「なんだ？この違いは」というところでタイの障害者に関心を持ちました。

そんなタイの障害者も、実は我慢していたことがわかりました。タイのバンコクに行かれた方は乗ったことがあるかもしれませんが、BTSという高架鉄道があります。ある日我慢できずに、「BTSにエレベーターをつけろ」という運動をすることをきっかけに、活動が活発になっていくのに出会いました。その後タイの障害者についてずっと勉強しています。

この写真はタイの障害者の人たちがピア・カウンセリングというか、ピアな活動をやりたり家庭訪問をしたりとか、一番右側は障害者による介助者の研修で、自分自身が練習台になって介助者を育てているというところです。



図3 タイでの調査風景

2 タイの洪水 2010-2011

そういうことをやっているうちに大洪水になりました。有名なアユタヤの涅槃像(ねはんぞう)も。横たわるブッタ像の下のわきの下から下が浸水しました。実はこの下に台座があります。その下にさらに数段の階段があるので、かなり水が来ています。

もともとタイは標高1メートルくらいがずっと続く標高が低い県で、洪水がある度に肥沃な水が来て、乾季になってその水が引いたときに農業をするという、水と一緒にある生活をしていたんです。だからお坊さんは、托鉢は船で来るというような生活をしていたんですが、どんどん都市化が進むにつれて、水をどんどんシャットアウトしていくような町づくりをしてしまったというのも、大洪水の一因だと言われています。



図4 タイの洪水 船をこぐ僧侶

図4の写真の左にあるのは、美しいリゾート地にある湖畔のロッジではなくて、民家が浸水

してしまって、本当は道路があつたり畑があつたところが、屋根しか残っていません。空港も水浸しになりました。空港は雨にも耐えてるし、嵐にも耐えるくらいだから、空港が別に水にぬれてもいいだろうと思っていたらとんでもないですね。洪水で浸かってしまうと、滑走路とかは夜でもいいように電気が走っていたり、いろんな精密な機械が下に埋め込まれていて、それがもう全部浸水してしまって、洪水になると使い物にならなくなります。

でもタイの人も長引きだすと遊びだしまして。お母さんはバイクの後ろに紐でサーフボードをつけて、子どもを載せて引っ張ったりするんですよ、(笑)。これやりたいでしょう。動物も災難で、ワニ園から 100 匹くらいワニが逃げたそうです。ですが、ワニ園のワニは餌を与えられていることに慣れているので、おそらく人をかんだりせずに死んだんじゃないかということを言われています。

3 洪水で被害が多かった障害者

(1) O君の例



図5 O君と家

洪水で被害が多かった人に3群があります。第一は、貧困者。逃げることができず、行き先もなかった。第二は、高齢者と障害者。第三は、土地勘のない外国人。

障害者はどうだったのかなという。私が調査に行っていたO君の話なんですが、洪水の被害にあったパトゥムターニー県というところのA村に住んでいる9歳男児です(図5)。彼はもう日本で重症心身障害児といわれる子どもです。両親、妹、弟、叔母、いとことそれで水が迫ってきたので近くのお寺に避難するんです。タイの洪水の場合、これはタイだけじゃなく東南アジア全体そうなんです、いきなりある日突然水がどんと来るわけじゃないんです。じわじわと水が上がってくるんです。だから、「だいたいもう明日ここが水になるよ」とか、「1週間後ここは水に浸かるから逃げなさい」というのは予測可能なので、ここもそうだったんですが、お母さんたちは近くのお寺にすべて避難するんです。家はもう冠水します。

ただO君、これは日本でも全世界共通だと思いますが、精神障害とか知的障害を持っていたりとか、それから高齢者の方や認知症の方とかは、やはり環境の変化に対してすごく弱いんです。そのときにやはり「O君も不安定になった」とお母さんが言っています。ちょうどこのときはO君に会いに行けなかったんです。

それでいろいろな声が出たり、家族ならでは分かるこの不安定さというのが顕著になってきたときに、今度は「お寺が冠水するよ」ということで、地域の人たちも「他のところへ逃げようよ」と言ったんですが。これ冠水する前のO君の家です。奥のバラックと思ってしまかもしれませんが、あれがO君の家でして、もう冠水したらあつという間にあっけなくつぶれるお家だったのですけれども、もうこれ以上O君の環境を変えたくない。それに、地域の人はまだO君のことを知っていたので、地域のお寺に避難しているうちはまだよかったです。ですが全く知らないところにお母さんは行きたくなかったんです。またO君に対してどういうふうな目に合うかとか、またO君がどういう反応をするか分からなかったので残るんです。そして10月に肺炎を起こして病院に行くのですが、お母さんいわく「ちゃんと診てもらえなかった」ということで、あっけなく9歳でO君は亡くなります。だから、これはいわゆる災害関連死の一つではないかと思うのですがこうなりました。

(2) Sさんの場合

別の女性障害者Sさんのケースです。彼女はDPI-APというアジア太平洋の障害者団体での事務局長で、英語も話せます。大きな職業訓練学校の卒業生です。コネクションが世界中にあって、その洪水のときにこの職業訓練学校の理事長と交渉して、この事務所ごと引っ越します。スタッフのアパートもその理事長が空いている部屋を貸してくれて、アパートを引き払わせて全員スタッフの家族ごとこの違う県に避難させたんです。おかげで同じ障害者で、スタッフも障害者なんですけど、誰も被害には遭わなかった。

(3) Nさんの場合

次は障害者Nさんです。違う県なんですけど、身体障害を持っているんですけど、図6の右側の写真が草の奥はもう川です。この手前のいすは、シャワーを浴びるときのシャワーチェアの代わりに自分たちで工夫したものです。水が近かったんですが避難しませんでした。もう水が来るよりも、行った先で自分がいかに嫌な目に合うかが嫌だと、もしくは慣れた家だったらトイレに行ったりお風呂に入ったりできるけれども、知らないところでトイレとかお風呂に入れない。それでもう行きたくないと行かなかった。結果的に浸水がそんなに来なくて被害はありませんでした。



図6 Nさんの家

(4) アーティストFさんの場合

Fさんはアーティストです。彼女の家はなかなかの資産家で、お友達も資産家が多いんです。チェンマイという北のほうにある観光地にお友達の別荘があるんです。その別荘に「じゃあ一緒に逃げようか」と言って、何不自由なく別荘に避難ということで無事でした。

何が言いたかったかという、同じ洪水が来るんですが、同じような障害を持っていてもその人の持っている力とかネットワークとか、それからスキルによって、あとはそれまでの経験ですね。それまでやっぱりすごくひどい差別を受けたり、嫌な思いをしてきている人は避難をするのが嫌だった。逆に不安がなく移動できるくらい日常生活の中で、やっぱりネットワークというか自分の安心できる場所を持っている人は、安心して避難した。だから、明暗が分かれたところです。

4 2016年東日本大震災での被害

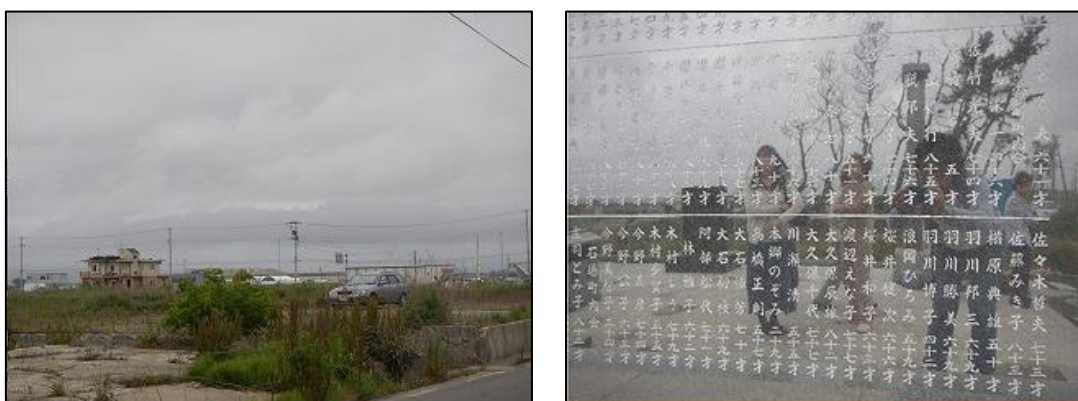


図7 左：宮城県荒浜小学校の跡地、右：慰霊碑には名前と享年が刻まれている

日本でも同じことが起こりました。2011年の東日本大震災の被災地の一つ、宮城県の荒浜小学校では、浸水して屋上に逃れました。この地区の慰霊碑(図7右)に刻まれた被害者

の年齢を見ると、ほとんどが60歳以上です。

5 熊本での災害準備プロジェクト

(1) 阿蘇地方での活動

自己紹介の続きになりますが、私はそういうことがあってこの熊本に来て、「減災型地域社会リーダー養成プロジェクト」を担当しました。熊本は災害県なんです。2016年には地震がありました。地震が来るのは誰も想定していなかったのですが、私の授業で想定していたのは土砂災害です。特に、阿蘇地方はカルデラ、火山がボンと爆発していっぱい火山灰が降ってできた地層です。しかもあそこは特殊な気候条件で、ゲリラ豪雨と言われている雨が年に何回か降るんです。だから毎年皆さん、ちょっとニュースを気を付けていてくださると、梅雨の時期それから台風の時期になると、阿蘇地方には必ず避難勧告が出ます。特に障害者・高齢者は避難勧告の前の準備情報の段階で、市は障害者・高齢者を先に避難させるということをしています。山が崩れて人間の集落を直撃するというのがロシアンルーレット状態なんです。山際にぶわっと人の家が密集しているんです。いつ裏山が崩壊するか分からないというのが、今、阿蘇に住んでいる方々の状況です。そういう状況を学生と一緒に聞きに行っていました。

全盲の女性を含めた、いろいろな方に話を聞きました。彼女からは、タイの障害者の人と同じ話を聞きました。避難しなかったと。なぜか。彼女は避難所になっている公民館の近くを毎日歩いているんです。あの辺は彼女の白杖が詰まる、下水管の穴が大きすぎて白杖が引っかかったりとか、段差が、道がボコボコして歩いていくんです。それから地域の人との関係性とか、この公民館を使ったことがあるけれども、自分にとって全然ファミリアではないと。これは何か身体感覚として、あそこへ行っても快適ではないんですね。「あそこで嫌な思いをしたり快適ではない思いをして過ごすくらいなら、慣れ親しんだ自宅で死んだほうがましだ」と彼女は訴えています。そういう話を聞きました。熊本県内の地域での防災訓練にも学生と参加しました。

(2) 東日本大震災での経験調査

福島県の南相馬のぴーなつつという事業所で、学生と一緒に、代表の青田さんに話を聞きました。東日本などをずっと周って女性や障害者の方に話を聞くということを繰り返していました。

(3) 大学での防災訓練

熊本地震の起こる半年前に、私は学生と一緒に炊き出し訓練をしました。「あんたたち今のんびりしているけど、もし何かあったらうちの大学きっと誰か押し寄せるよ」と。それで「有無を言わず避難所になるのだから、炊き出し訓練くらいやろう」ということで、「4人で300人分のご飯を作る」というのをさせてみました。成功するためでなく失敗させてみようと思いました。案の定、まず学生たちは300人分のご飯が何合炊いたらいいか分からな

い。何升ですね。そして有り体に大きな釜を見て、じゃあこれで炊こうとなったときに、ある学生が「水をどんだけ入れたらいいか分かんないね」と。それで他の学生が「いいんじゃないね、途中で開けて水が足りなかったら足したらいいんじゃないね(笑)」と言いました。私は「駄目です」と言いました。一回自分で作ってみたいとわからないんです。300人分の材料がどれだけなのか。材料を切るのにどれだけ時間がかかるのか。煮込むのにどれだけ時間がかかるのか。そういうのを体験させることをしたかったんです。だから失敗してもいいと思ったんですが、一応、日赤の方に来ていただいて、いろいろアルファ米の炊き方とかを学びつつ、でもできたご飯はもったいないから、学生に学食の前で嫌味のように100円で売りました。2班で作ったので600人分あったんです。その日、学食の売り上げはかなり減ったと思います。カレーは禁止にして、「他のメニューを考えなさい」と。学生は、ずるいからハヤシライスにしましたけれども(笑)。

そのときに、「高齢者・障害者が来るんだよ。そうしたらどうしたらいい？」ということで、シミュレーションもしました。これが、地震の時に、すごく効いてきました。このとき、学生から意見がいろいろ出ました。体育館のマットレスを使えばいいのではないかとか、介護福祉学部で介護実習室がありますので、そこにあるポータブルトイレを使ったらいいんじゃないかとか、学生がどんどん言い出しました。ドイツ製のフランス製の機械浴のうん千万する機械が2台あるんです。あまり使っていないんですが。学生は、「じゃああれを使ってそこに障害者・高齢者が来られるようにしたらいいのではないかと」言っていました。残念ながら、その建物は壁は壊れるは、ガラスは割れるはで、その機械浴は使えませんでした。ただ、そのときに言っていた備品の活用方法というのがすごく後で生きてきます。学食の皿を使ったらいいのではないかとか、いろいろな想定をしていたんです。

6 熊本地震

(1) 前震

いよいよ、地震当日2016年4月14日の話です。避難所立ち上げの前に、私は前震の時にどこにいたか。実は体育館のシャワー室におりました。シャワーを浴びていてほとんど泡だらけだったのですが、ゴーと揺れました。頭をよぎったのは、東日本のときに屋根がつぶされてた映像でした。私は裸のまま救出されるのが嫌だったので、慌てて揺れが収まるのをその個室の中で待って、体を拭いてパンツを一生懸命はいて、はい出して来て研究室に行きました。研究室は、思ったより資料が落ちていなかったです。言いつけに背いて棚の上に荷物を積んでいました。積んでいたものは落ちました。やっぱり棚の上に何の備えもなく物を置くのはやめたほうがいいと思いますが、それが落ちていたくらいなんです。

このときに、200人ぐらいの方がいったん避難で来られました。そのときは、うちの大学は広域避難所で、指定避難所ではなかったんです。広域というのは、グラウンドを貸してくださいぐらいで建物を開放しなくてもいいんですが、この季節に、やはり寒いときに、夜グラウンドに来られたら「トイレに行きたい」「寒い」ということで、うちの職員が気を利かせて「この部屋をどうぞ」ということで教室を解放したんです(図8)。後にこれがまた避難所

になります。

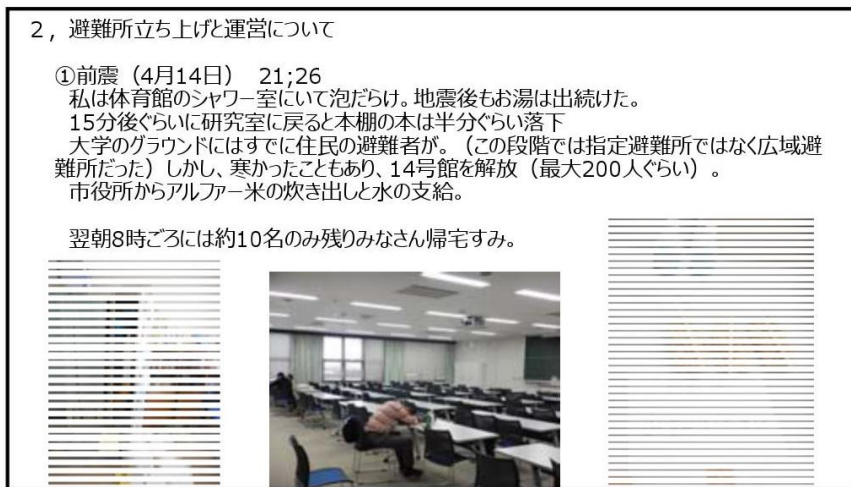


図8 熊本地震の前震の時

この頃はまだ全然危機感がなく、翌朝、皆さんは帰られて、市役所から届いた支援物資として、炊き出しのお米や水も置いてあるぐらいで、やれやれとなりました。

（2）本震

問題は次です。4月16日午前1時です（図9）。またシャワー中だったんです。なんでかと言うと、前の日は断水だったんです。それでやっと水が出た。このとき私の部屋に一人学生が避難してきたんです。なぜか。前震の段階で避難して来ていたんですが、7階建てのマシンの5階に住んでいる学生が、床上浸水になりました。なぜだと思います？

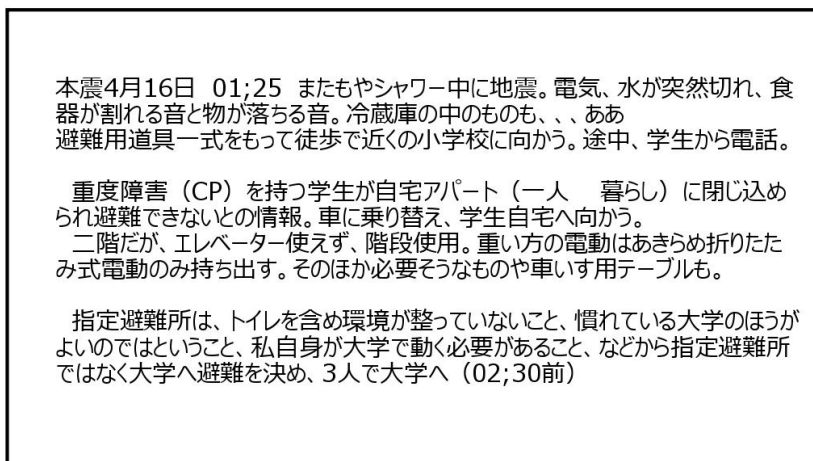


図9 熊本地震の本震の時

給水管の破裂です。それで、上から水が落ちてくるんです。ダイニング、リビングダイニングに排水溝があるお家がありますか？ ないでしょう。排水溝があるのは、せいぜいお風呂場ぐらいですよ。あと、キッチンのシンクにはもちろん排水溝がありますが。人間の家ってそんなに簡単に水がはけないんですね。いいことですね、気密性が高いって。だけど、家の中で、上からどんどん水が落ちてくる。そこに余震が来てこうシェイクされてなすすべ

もなく、女子学生は私の家に避難してきたんです。そのときに、彼女を先にお風呂に入れました。私は優しい先生なので「どうぞ先に入りなさい」と言って、彼女はベッドの上で寝かせた。そして、私はシャワーを浴びていたときに、また、どーんと来たんですね。

(3) 避難

地震が来たら、机の下に入ることになっていますが、現実的に私はできませんでした。4年間ずっと防災の勉強をしていたんですが、人が下にもぐれるテーブルは、皆さん、お家の中でどこにあります？ キッチンなんですよ。キッチンには何があると思います？ 茶碗です。私が沸かしていた麦茶の鍋が吹っ飛んで、それから茶碗が割れて、とても机の下に逃げ込めるような状態ではなかったんです。それで、私は、その夜中、お風呂場から上がって、揺れがおさまるのを待っているときに、学生に「動くな」と言いました。なぜかというとな彼女が寝ていたベッドは、上に電気もなく近くにガラスもなく本棚も近くになかったの、わが家では一番安全なところだったんです。だから「頼むからそこから動くな」と叫びながら、電気もぱっと消え、お湯も出なくなり、ただ暗闇の中でガチャガチャと茶碗が割れる音がしました。あと冷蔵庫の中の物が飛び出ました。それから、今でも、私は茶碗が入っている食器棚にひもで結んでいます。きょうはそこにお守りも結び付けてきました。どうか私がいけない間にあれが開かないように、ですね。

前日の夜の前震の後に余震が来るかもしれないと思って、避難道具は作っていたんです。一式。それで、その荷物をつかんで、ちょっとやはり家にいるのはやめようと思いました。「余震が収まるまで避難しません」という方もいますけれども、高層になればなるほど揺れは激しいです。震度3でも、体感はどんどん震度4、震度5と増します。私の友達は9階のマンションだったんですけれども、窓から投げ出されるのではないかと思ったというくらい振られたそうです。なので、特に免振とかでなくて揺れるようになっている建物は、おそらく震度5ぐらいになるともうかなり怖いはずですよ。私は3階に住んでいても、1階の人よりも体感が怖いです。だから、震度3とか震度5とか震度7という数字だけではないんです。どこにいるかによって、やっぱり全然体感が違うので、そこも私はちょっと気を付けておいたほうが良いと思うんです。

(4) 障害学生の救助

そこで、避難。近くの小学校に歩いて逃げようと思いました。車で渋滞は嫌だったので。ですが、途中で、LINEで障害を持っている学生から連絡がありました。彼女は高校を卒業すると同時に一人暮らしを始めて、24時間介助が必要なのですが、重度障害なので、ヘルパーを使いながら学校に通うという見上げた根性です。無鉄砲とも言いますね。彼女から泣きの電話が入りました。珍しく、「先生助けて」と。実は私たちの教員、学生と一緒に持っているゼミの全員のLINEがあって、学生が「助けに行く」と言ったのですが、二次被害が怖かったので「あんたは小学校に行きなさい」ということで私が迎えに行ったんですけれども、エレベーターが動かないんです。それで、電動車いすがいいのはもちろん分かっている

のですが、私が一人で、電動車いすを2階から下ろすのはもちろん無理です。それで、簡易式の電動車いすを1台下ろして、もう一個彼女の持っていた手動に彼女を乗せて、私は手動の車いすだったら、乗っている方の体重にもよりますが、2階から1階だったらぎりぎり一人の力で下ろせます。そして下ろしました。必死で。彼女の毛布とか着替えとか、車いすテーブルを含めた身の回りの物を一式とにかくつかんで、「じゃあどこに逃げようか」ということで、近くの小学校が指定避難所なんですけど、皆さんご存じのとおり、車いす用のトイレとか、バリアフリー施設がある小学校、中学校はあまりありません。熊本だけでしょうかね。いなかの県の熊本は、全然バリアフリーじゃないんですよ。それで、そこに逃げたらやっていけないと思いました。もう一つ、私は「大学で動かないといけないかな」という思いがありました。大学に行くと彼女の友達がいるし、私も時々様子を見に行けるし、車いす用のトイレとかバリアフリー施設がいっぱいあるし、で「大学に行こうよ」ということで大学に来ました。

(5) 本震直後

本震直後の私の研究室では、本は全部落ちました。棚は全部固定していました。これ棚を固定していなかったら、私はもう多分、研究室に入るのをやめたかもしれません。このままでいいかなと。図10の右側の写真は教室で、2時半ぐらいのときの写真です。まだすかすかでしょう。奥にでももう車いすの方、高齢者の方が何人かいらっしやるのが見えますか？



図10 熊本地震本震直後の教室

ここに、明け方になるにつれ人が増えます。どうなると思います？ ちょっと分かりにくいですが、部屋が埋まっていくんです。すると奥にいた車いすの方は外に出られないぐらい人が埋まってきます。皆さんやっぱり本能があって、自分が確保したスペースは簡単に譲ってくれないんです。そうすると、私はこの日の夜は一晩中2時から朝8時ぐらいまでトイレ番でした。高齢者の方とか障害者の方の。みんな遠慮なく私に「トイレに行きたい」と言ってくれます。遠慮して「いいですよ」とか声かけられないんじゃないかと、積極的にみんな「トイ

レお願いします」と言うから、みんな偉いなと思いました。人にこうされるのが慣れているのかと思っていたら、後で分かりました。市役所の職員が後で駆けつけてくださって、私が目立つように黄色い服を着ていたら、「ヘルパーさん」と言われました。私はどうもヘルパーさんと勘違いされていたらしくて、だからみんな遠慮なかったんです。いいことなんですけれども、後でばれると気まずいかなと思って「すみません、一応大学の教員なんですけど」と言いました。

ここから外に出るのが難しくなります。「お水を飲んでください」と言っても、「トイレに行きたくなるから嫌だ」と飲まない。なぜかという、トイレに行くたびに座っている人に「すみません、どいてください」「すみません、どいてください」「すみません、ごめんなさい」「すみません、ありがとうございます」と言いながら出ていくんです。トイレが終わって自分の場所へ戻ろうと思ったら、また「すみません、すみません」「すみません、ありがとうございます」、すみませんを繰り返さない自分の場所へ戻れないんです。それを、権利主張の強い障害者運動をやっている障害者はいいですよ。だけど、一般の高齢者とか障害者の人たちに、それを毎回やるかと言ったらやれないですよ。人間の心理はそんなに強くないですね。で、遠慮するんです。

「どんどん横になってください」と言ってもならないんです。床に寝るのも一回車いすから床に降りるのはすごい大変です。同じ高さのベッドから車いすに乗り移るのはまだ簡単。でも、車いすから床に寝て、また寝てトイレに行くときに起きて抱えてもらって座ってということをする、そうするとさっきの「ごめんなさい」「ありがとう」を繰り返すと思うと、それだけで気が遠くなりますね。これで15時間過ぎるんです。「もうやばい」と思って、「これは何とかしなくては」ということで、学校側の理事長と学長に直談判して、使っていなかったホールを障害者・高齢者が体を伸ばして寝られるスペースとしたい、「トイレに行くときに遠慮してほしい」ということで、別の場所にスペースを確保しました。

7 熊本学園大学での障害者・高齢者用スペースの設営

ちょっと見にくいかもしれませんが、図11の左上の写真の上にライトがあるのが見えますか。ここはホールなので、今ここに降りてきていますけれども、上に照明のライトがぶら下がっているんです。市役所からは、この部屋を使うなと言われました。なぜかという、「余震であのライトが落ちてきたら危ないから」と言われました。けどもうスペースがなかったんです。それでふと思って、ライトを下ろせばいいのではないかとということでぎりぎりまで下ろしました。

すぐ駆けつけてくれた学生たちは、4年間私と一緒に勉強した学生たちで、さんざん東北の震災のこととか勉強してたんですね。だから避難所で、女性が知らない男性が隣に寝るのが嫌だったとかという声とかを聴いていたんです。そうしたら女子学生がふと「先生、このライトにシーツを掛けて簡単な間仕切りを作ったらどうですか」と提案しました。だから完全に分離されていないんです。実は向こう側とこちら側は自由に行き来できるスペースなんです。けど、どうせライトの下に人が寄ってほしくないし、あそこにシーツを掛けるこ

とで軽い間仕切りになっている。そして別に絶対男子立ち入り禁止と言っているわけではないんですけども、寝るときは女性は女性のスペース。家族とかカップルとかで一緒に寝たい人は、男性のほうでよければ男性のほうで好きなスペースを確保してもらって、「どうぞ自由に」ということでしました。

(1) 備品を活用：トイレ、シャワーチェア

図 11 の左下の写真の一番向こう側は、ポータブルトイレが置いてあります。このレイアウトは全部学生が考えたものです。それと障害を持っている学生が、レイアウトの条件を考えました。車いすが利用できること。だから 2 台あるスペースとマットレスを中央にする。トイレのスペースとみんなが食事をできるような机のスペースは遠く離す。障害者トイレに行くところのスペースには物を置かない。学生が初日から頑張ってくれました。このときに障害者が半分くらいで高齢者が半分くらいでした。

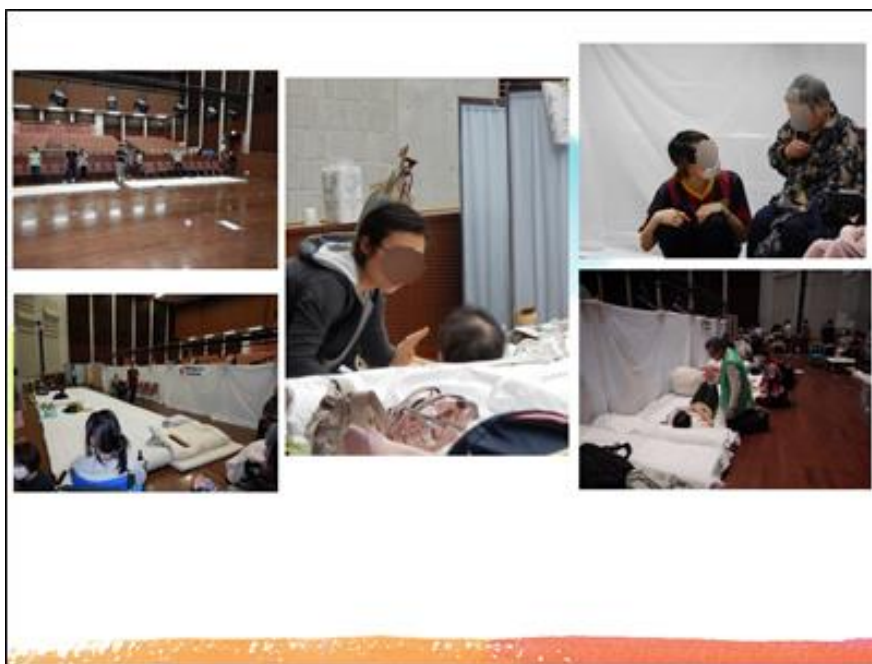


図 11 熊本地震後の熊本学園大学の講堂：福祉的スペース

一番しんどいというか本当に気の毒というか、こちらも泣きたくなったのは、図 11 の真ん中の写真の方は、老人保健施設から家に帰ってきた 2 日後に地震にあいました。脳梗塞なんですけれど失語症になって言葉が出なかったんです。だから、怖いけど、言いたいことがあってもうまく言葉にならないんです。辛抱強く学生が一生懸命聞くんですけども、イエスもノーも「はいはい」と言って、もうきつそうだなと思って「何々さん、言葉が出らんけん悔しかでしょう」と言ったら、ポロポロ泣いて。彼女は座位が保てないので、体育館のマットレスを丸めて、そこに斜めに座れるようにしました。これ以外に何もしようがなかったんです。

お風呂も近くのシャワーブースしかないなので、障害者の人や高齢者の介助が必要な人は

中も個室に入れないんですね。だから全部部屋を閉じて、申し訳ないですけど床にマットレスを敷いて床に寝てもらって、シャワーが届く範囲でお湯をかけて体を洗いました。私は20年間障害者の介助をやっているんですけども、生まれて初めてです、裸で介助をするというのをやりました。いいですね。今までは、私はTシャツ短パンを着て介助をするのが当たり前だと思っていたんですが、一緒に裸でした。後でお茶を飲んでいるときにおばあちゃんが、「あんときは先生は裸で介助してくれて、裸の付き合いになったもんね」と言われました。この辺ぐらいから距離感が、信頼関係が生まれたというですね。だから裸の付き合いは大事なんだなと思いました。

(2) 学生ボランティアへの感謝

いろいろ学生たちが手伝ってくれました(図12)。一番向こうは一緒にゴミを拾ってくれました。学生が炊き出しもやってくれました。この学生たちは2週間前に福島の子どもたちを保養するキャンプをやっているリーダーだったんです。半年前は火起こしなんてできなかったんですけども、キャンプのリーダーになるために訓練でやっていたんです。それで半年前はビービー言っていたくせに、急にこのときうまく行って、「他の学生がいかにか下手だったか」ということを自慢気にとうとうと語ってですね。「いやいや、あなたたちも半年前はそうだったから」と言いたかったですけども、感謝しながらやってもらっていました。



図12 熊本地震後の熊本学園大学：学生による炊き出し

もう一つ学生に感謝は雰囲気づくりです。最初の3日間、物資は何も来ませんでした。当然ながらですね。そのときにノロウイルスとかインフルエンザ、それから風邪もそうですし、それから精神障害者の人や高齢者の人の気落ちをどう防ぐか。防ぐ手段なんか雰囲気づくりしかないんです。それで、私なんかがどんなに頑張っても、どんなに「水飲んでください」と言っても飲まないくせに、学生が「ちょっと散歩に行きましょう」と本当に数メートル離れて外に出て、ちょっとお菓子を持ってペットボトルを持って行って、学生に「このペット

ボトルを1本飲み干すまでは連れて帰って来るな」と言ったら、すぐ帰ってきたんです。私が言ってもあまり飲まないくせに、学生が「はい、ナントカさん飲みましょう」と言ってコップについたら「はいはいはい」とぐびぐびぐびと飲んで、もう30分ももたなかったです。早く帰された幼稚園の母親の気持ちだったんですけれども。もっと遊んできてと。

トイレに行くときも、自分の家のトイレと勝手が違いますから、転倒防止などを気かけます。単に楽しくしゃべっていただけではない。私は学生に「頑張らなくていい」と言っていたんです。「あなたたちがしゃかりきに動けば動くほど、何かピリピリした空気になるから」「ご飯も取ってきてあげるのではなくて『一緒に取りに行つて一緒に食べて』」と言ったんです。ずっと同じ場所に座らせるのではなくて、一緒に取りに行つて冗談言つて、おいしくないならおいしくないでいいんです。「こんなまずいのもう食べたくないですね」でもいいから、「一人で孤食をさせないで」と言いました。だから、一人でポツンと座っている高齢者がいたら、「ちょっとナントカちゃん、何々さんが一人で食べてる」と言うと一緒についてくれる。だから頑張って働くのではなくて、一緒に取りに行つて一緒に食べておいしいとかなんとか、そういうふうやっていってもらったんです。最後のほうは、高齢者も一緒にボランティアをやってくれました。

(3) オーダーメイドの手製段ボールベッド

段ボールベッドも届きませんでした。もうそれは1カ月くらい届かなかった。10日くらい過ぎたら支援物資が届きだして、段ボール箱が余りだしたんです。そこで、支援物資の箱をベッドに使わせていただきました。水の段ボールとクラッカーの段ボールでは高さが違うんです。それで、一人一人に合わせて、ひざの高さとか体の状態に合わせて「どの高さがいいですか」と聞いてやったので、結果的にはオーダーメイドのベッドになりました。一番真ん中の写真は分かりにくいのですが、高い、普通、低いという段々になっています(図13)。それぞれの体の状態に合わせてやることができました。あのクラッカーは最後の閉鎖の日までありまして、1年後にも、私の研究室にまだ積まれていておなかを空かせた学生が食べていました。



図13 段ボールベッド

(4) 雰囲気づくり

外部からは、漫才師が来てくれたり。あと助かったのは、地元の女性団体の人たちが洗濯ボランティアをしてくれました。避難所ではお洗濯が困るんですよ。私も洗濯難民でした。お水は断水中になっていて洗濯機も使えないんです。特に障害者・高齢者などは家に帰れないので、来てくれてビニール袋に詰めて持って帰ってくれるんです。そして自分の家の洗濯機で洗濯をして干して持ってきてくれるんです。それで、「何かできることはないですか」みたいに。特別なことではなくて、そういうちょっと自分の家の洗濯物のもう一回だけ洗濯機を回してもらって、ちょっと干して取り込んで畳んで持ってきてもらうだけですごく大助かりですね。

お誕生日を迎えた方に、私はケーキを奮発しました。コンビニのケーキではなくて、ケーキ屋さんが再開したときにそのケーキを買ったりとかして。地震そのものがトラウマという人もいますが、その後の避難所生活がトラウマという人も結構いらっしゃるんです。嫌だったとかつらかったとか、しんどかったとか。東日本大震災でも同じことを聞きました。この誕生日ケーキを食べるのは実は最後のほうなんですけど、食べながらおばあちゃんたちが「避難所はつらくてきついかと思ってたけど、ここは楽しかったね」「次にまた地震があったらここに来ようね」と言ってくれました。ありがとうございます。何よりのほめ言葉です。

(5) 介助体制

介助体制はいろいろと大変でした。緊急時、特に最初の3日間、私たちはもちろん帰れません。24時間体制なんです。昼も寝られないし。夜の介助は学生にさせたくなかったし、させられませんでした。ボランティアにもさせられなかったんです。コツが分からない人が、

力任せに介助をして転倒したら、せっかく避難所に来て寝たきりにして帰すわけにはいかないんです。高齢者はやはり骨折したら終わりなので。万が一学生がケガをさせたら、学生にとってみたら一生心に残る傷になります。

じゃあ誰がやるかといったら、避難してきた障害者が介助者を4名連れて来てくださっていたんです。その介助者が、障害者だけでなく「ここにいる間は全員俺たちの仲間だから」ということで高齢者の面倒も見てくれました。私はこの人たちがいなかったら、もうもたなかったですね。特に夜中は。後でも言いますが、障害者は支援されるのを慣れている。人を使うのに慣れているんです。高齢者は、重度の障害を持っている高齢者はもう既にケアハウスか施設か手厚い家族と一緒にいます。じゃあ誰が避難所に一人で来ると思いますか？ぎりぎりの要介護じゃない要支援1とか2くらいの人が、自宅改造をして、でも何かの事情があって一人で暮らしている人たちが、突っ張って突っ張って暮らしてきている人です。自宅はベッドからトイレに全部手すりがあるし、住宅改造が終わっている環境に慣れているんです。でも夜中に、いきなり床に寝かせられて立ち上がってトイレに行くのはまず無理です。介助され慣れていないので、慣れていない人が慣れていない介助をすると、もう転倒です。トイレに行くと、ポータブルトイレは備え付けではないので危ないのですが、そこに家と同じに思って全力をかけて移ろうとすると、ポータブルトイレごとこけてしまうんです。やはり寝ぼけてらっしゃるんだなと思うんですが、家と勘違いをして、トイレトペーパーは左にあるのに右にあると思われてトイレトペーパーを一生懸命「ないない」と探すとかですね。「ナントカさん、こっちですよ」みたいな声かけが要ります。認知症の方も来られていて、夜が油断ならなかったですね。

4日目に、鹿児島と関西の介護福祉士の資格を持った人たちが施設から駆けつけてくれました。それまで、「一般の人に、ボランティアの人をお願いできないな」と思っていたけれども、その動き方を見て「ああ助かった」と思いました。動きが全然違って、後は夜は任せて私は寝ました。その日の夜は気持ち良かったです。あの日の睡眠の気持ち良さは忘れられないです。ああいう外からの支援は大事ですね。

さっき言ったヒューマンネットワーク熊本も、自分たちのことだけではなくて、一緒に考えてくれます。このヒューマンは私が学生の頃から知っている勝手知ったる施設です。最大56人ぐらい障害者、高齢者が来られて、私一人がずっと常駐だったんですけども、いらした方の半分ぐらい私が知っている人たちだったんです。身体感覚もコミュニケーション方法、ニーズも知っていました。すごくやりやすかったです。でも、介助者はもう限界です。だから、やっぱりスタッフを支えるスタッフがすごく大事だなと実感したのが避難所でした。そこから後半は、県外からいろいろな人たちが来てくださって、このいすといすの間に寝てくださっていたんですが、すごくありがたかったです。

(6) スタッフを支える



図 14 阿蘇の福祉施設のスタッフ支援

図 14 は阿蘇の福祉施設です。孤立した施設の職員にはジェンダーバイアスがかかります。施設の職員でケアに当たるのは、ほとんど女性です。そしてその女性は、自分も被災者です。人によっては車中泊、もしくは家がつぶれたままそれでも目の前の人を助けなくてはと思って来ているんです。その人たちは、支援物資が届いても足りないときは、「施設の入所者のために」と言って自分は我慢するんです。そこで、私たちは余った支援物資から女性たちが使ういろいろな物を、お菓子も含めて、サンタクロースの袋に入れて、「これはスタッフのために持ってきました」とわざわざ施設に行って「スタッフさん、一つずつ持って帰ってください」と渡しました（図 14）。人の目がある中で箱に積んであるのをいっぱい持って帰るのは、みんな気が引けるんです。けどたくさん入っている袋を一人一個ですと言われると一人一個持って帰るのは全然気がとがめないんです。だから持って帰りやすいように袋に詰めました。そうしたら学生が何かコメントを書き出して。紙コップに「頑張ってください」とか。それでこれを一つずつ届けに行ったりしました。

（7）帰宅支援

もうひとつ大事なのは帰宅支援です（図 15）。東日本大震災もそうですし、阪神・淡路もそうですが、避難所運営の方法はマニュアルがあります。帰宅支援のマニュアルを私は見たことが無いんです。誰が最後に残ると思います？ 家がつぶれた人だと思います？ 病気の人だと思います？ 違うんですよ。最後に残る人は、そんなものは関係ないんですよ。コミュニケーションとか信頼関係とか頼る人とか、そういう社会的なネットワークがなかった人が、最後の最後まで残ります。その結果、阪神・淡路大震災は 20 年たった今も被災者支援をやっているんです。なぜならば、避難所、仮設住宅から帰る場所がなかったから、その人たちのコミュニティーを維持するためにはボランティアが継続的に関わり続けないと、

その人たちはもう放っておけないんです。

避難所もそうです。益城もそうでした。熊本市もそうです。最後まで残るのは、何かの依存症の方とか、それか本当に一人で来られていて一人で家を片付けたりできないとか、相談する相手がいない方です（図 16）。相談できたり親戚がいたりする人は、親戚の家に早々に行かれたり、家族がお金を出して新しくアパートを借りてくれたりとかですね、何とかして家族が引き取ったりしてどんどんみんな出て行かれるんです。そういうのが全部なくなったときに、どうやってこの方々を支えていくかというところが、実は次の災害に対する社会づくりというところに対するメッセージでもあるし、帰れないという、帰る場所がないということは無言の SOS なのかなと私は思って見ていました。

帰宅支援

「ヒューマン（障害者団体）はいい、でも他のひとは？」

→「ピン」できている避難者…これまでどことつながっていなかった、いても薄かった避難者たち

※人とつながっていることの重要性、仲間の重要性（もともとの信頼関係やニーズの把握）

- ・コミュニケーションと信頼関係
 - ・帰宅に向けた片付けボランティア
 - ・引っ越し先探しの手伝い
 - ・村上博市議（車いす使用者）の奮闘（熊本市を動かして）
 - ・片付け・梱包・引っ越しの手配（ボランティア総動員）
 - ・引っ越すこと（避難所を出て行くこと）の不安解消
 - ・避難所閉鎖後も続く交流
- ※長期化すればするほど、次へ移ることの不安がます。そのこと自体が、社会へのSOS

色々な場所・団体・人につないでいきたい

図 15 帰宅支援



図 16 帰宅支援をした人たち

8 熊本地震から学んだこと

(1) 安心して居られる場所

熊本地震から何を学んだかなということのを少し共有させていただきたいと思います（図17）。障害者にとっての避難場所とは何かかなと思ったんですが、やっぱり安心して居られる場所かなと思うんですよ。排除されないと思感を感じる場所。避難所に行ったのに、そこに自分で行っちゃいけないんだと思わされることは、めっちゃしんどいと思うんです。なので緊急時だからこそ、「自分はここにいても安心していいんだ」という場所をやはり考えないといけない。それは別に障害者に限らないですけども。それだけのハードとかソフトですね。

熊本地震から学んだこと

① 障害者にとっての避難所とは？
 「安心して居られる場、誰も排除しない場」緊急時だからこそ必要
 →そのためのハードとソフト；場所とスタッフ体制

「建物」・・・当然バリアフリー、電源、水、雰囲気、広さ
 「スタッフ体制」・・・特に最初の数日間、そこにいる人間でなんとかする必要がある。つまり、介助者もボランティアも被災者。
 いかにして、最初の数日間を過ごすか。
 ※外からの「（介護の）専門家」の支援が本当にありがたかった。

東北実績自慢、口出すだけ、データ収集だけの専門家は不要、マスコミも考えもの
 （特に知的/精神の被災者にとって、1利あって9害）

図 17 熊本地震から学んだこと：場所、スタッフ

では避難先案は？

一番近い避難所に避難できることがベスト、本来はすべての指定避難所はバリアフリーであるべき

しかし、現実的にはまず避難先を想定しておくことが大事
 避難先を想定するところの**事前の打ち合わせやコミュニケーション**が不可欠
 トイレ・空間（広さ）・そのほかの利便性や融通の範囲など
 （当然それも震災によってだめになることもあるが）

日頃からの関係性が非常に大事

学園大学の場合、20年以上の関係と、東さんや私など関係者もいた。

大学は、学生ボランティアが得やすいという意味でも候補の一つ
 ホテルや旅館もよいかも？

図 18 避難先

それで場所があればいいのかというと、実はそうでもないんです（図18）。ある程度のスタッフも必要だということもある。建物は当然バリアフリーで、電気、水、水道、断水とか電気とかしょうがないときもありますが、うちの大学は断水だったんですが、3日間、水洗トイレがもちました。これはすごく良かった。水が流れなかったら、私たちはどれだけ大変

だったかと思います。何で水がもったかという、雨水タンクを私たちは上に持っていて、あと地下水をもう一個上に上げているんです。これが下に落ちてくる制度なので、前の日に満タンになっていたんですね。だから上に上がらなかったけれども、上のがいつなくなるかと私たちはドキドキしながらやっていて、4日目に水がなくなりました。それでプールの水をトイレに運びました。幸い、5日目に一応水が復旧したので、水運びは1日だけだった。本震直後から、全国の、横浜とか広島とか、あちこちの水道局の車が走って水道の復旧に務めてくださったことには感謝です。

(2) スタッフ体制

スタッフ体制も考えておく

高齢者障害者スペースをもうけるということは、ケアニーズがあるということ。

「スペースの確保」に加えて、ケアニーズを誰が支えるのか、というも考えておく必要がある（大学側（避難所側）も、障害者団体側も）

特に避難所に来る高齢者は介助受け慣れていない場合も多い。しかし、自宅とは違う、転倒等事故の可能性大。これまでなかったケアニーズが出てくる。

また、障害者が日頃慣れているスタッフを連れて避難したとしても、おそらくそのスタッフも被災者、加えて他の支援が入るまでは働きづめになる可能性もある。

障害者の安全や権利をまもるだけでなく、介助スタッフをどうまもるかも考えて欲しい。（当事者主権とはいえ、被災という意味ではスタッフも当事者）

介助者とはいえ、場合によっては3日4日、フルで働き続ける可能性もある。身体的精神的負担は並大抵ではないはず。

→現場はしょうがないとしても、そういう状況になる可能性が大いことを想定しておく必要がある。スタッフも人間

図 19 スタッフ体制

大事なものは、スタッフ体制です（図 19）。いる人間がそこで何とかしないといけないんですよ。支援が来るまで持ちこたえないといけないんです。支援は必ず来ます。来ますけれども、後でも言いますがけれども、いきなり支援が来ることはありません。なので、特に最初の数日間だけは、そこにいて人でまかなわなければなりません。「自分は3日頑張ったらもう寝る」と思ってもいいと思うんです。だけど、最初の3日間をどういうふうにするかというところは考えないといけない。「頑張っている人たちをどう応援するか」ということも考えていかないといけない。私はだから「次に何かあったら飛んで行きます」と、来てくれたボランティアに言います。

(3) 来てもらって困る人

ただ、来てもらって困る人たちもたくさんいました。熊本学園大学が有名になりましたので、あちこちからNPO、NGO、専門家という方々が来ました。DMATの方々ですら、来て情報収集をして、「ふーん、すごいですね」「うわー、すごいですね」と、わーっと帰っていくんです。それで「なんか困っていることはないですか」と聞きます。「きた！」と思って「これがこれで、これとこれが困ってます」と言うと「ああそうですか」と言って。後日何か来

るかと思ったら何も来ないんです。フィードバックがない。唯一、熊本市の歯科医師会だけが、「入れ歯を入れる容器がない」と言ったら、翌日にブルーの入れ歯容器を100個ぐらいくれました。それまでは、高齢者が入れ歯を入れる容器がなかったんです。みんな茶碗とか紙コップに入れていました。100個もいらなかったんですけれども（笑）。あとでご飯を食べる容器にはなりました。

マスコミも考えものですね。1日にひどいときは15件ぐらい来まして、ちょっとこれは学校側に私は後で文句を言いました。「はい、皆さん、マスコミがきました。協力してください」みたいな感じが少しあったんです。マスコミはもう無言で顔をクローズアップするんです。いい映像を撮りたいから。それを1日に何回もやられると、本当に土足でずかずか来るってこういうことだなと思いました。やはり知的とか精神の障害者とか、認知症の方にとっては、それがすごくストレスだったみたいで、いったん雰囲気落ちたんです。ところが、面白かったのは、精神の方が「自己紹介してもらったら、撮影されてもいいんだけど」と言いました。それから勝手に私がその人の名前をつけて「ナントカさんルール」というものを作りまして、マスコミの人には、「映す人の名前を聞くだけでなく、自分の自己紹介もしてください」と話しました。カメラとかを回す前にいったん下に置いて、「ナントカさん、こんにちは。僕の名前はこうこうです。こういう会社から来ました。よろしく願います。」と一言言ってくださいと。「その時間をもったいなくてできないというのであれば、もうちはお断りします」と。5分でいいんです。そして、それだったら撮られてもいいということになりました。報道は一理ありました。たくさん支援物資をいただきました。ありがたいんですけれども、九割のほうは痛かったです。

（4）避難先案（近くて、アクセシビリティの確保された環境）

それで、避難先の案なんですが、一番いいのは自分の家から一番近い避難所に安心して避難できるの場所があるのがベストです。指定避難所にする段階でそこはバリアフリーを条件にしてほしいと思います。小学校、中学校を新築する段階では、必ず体育館には障害者用トイレとか車いす用スロープとかそういうものを備え付けにしておいてほしいと思います。これは災害のためだけではなくて、ユニバーサルデザインという意味です。現実的に、避難所を想定しておくことは大事ななと思います。自分はどこに逃げるのかというのを考えておくだけで全然違います。

なぜ熊本学園大学で、多くの障害者や高齢者を受け入れられたかということ、障害者との20年以上の関係があるんです。ヒューマンネットワーク熊本の当事者の中には、元熊本学園大学の学生がいます。なぜ元熊本学園大学の学生か。熊本学園大学は30年ぐらい前からバリアフリー化に取り組んでいまして、私が学生の頃、夏休みとか春休みの長期休みがあるたびに、階段だったところがスロープに変わっていくとか、車いす用トイレが一個増えているということが毎回起こっていました。そうやって環境を整えてきたので、障害を持っている学生の入学が多かったんです。それとヒューマンネットワーク熊本の人たちの事務所が近いので、トイレに行きたくなったら熊本学園大で休憩してトイレに行ってから違うところに

買い物に行くとかされていたんです。あと私と東俊裕さんという車いすの教授がいました。だから「熊本学園大に行ったら何とかなるだろう」と、地域の障害者が思った。熊本学園大で許可したわけではないんです。ただ「ちーちゃん行っていい？」と言われたので、「来たもん勝ちだから来て」と言ったんです。「来て居座ったもの勝ちだから」と。だから、施設側では「来られたらどうしよう」と思われているかもしれませんが、障害者の皆さん来てください。多分、来たら追い返されることはないですし、その中で工夫しながらやっていくことになると思いますので、自分がいいと思う場所に行く。それは自分の身を守る一つの方法だと私は思います。

大学は学生ボランティアがやりやすいという意味でもいいのですが、例えばホテルとか旅館とかでも、広い場所があったり、ゆっくり体が伸ばせる場所とか、公共の施設に近ければ近いほどトイレが使いやすいということもありますので、自分にとって一番いい場所というところを、皆さんぜひ日ごろから想定しておかれるのも大事かと思えます。そして、できればその人と仲良くなって、ある程度は融通を利かせてくれる、好きにしていよと言ってくれるのも大事かなと思えます。

(5) 介助者

それから、介助者は、絶対、必要です。スタッフがこけたら障害者もこけますので、自分が避難するときに誰を連れて行こうとか、どこの団体にSOSを出そうとか。先ほど北村さんが面白いことおっしゃって、「自分のところでまかなえないのであれば、どこかのNPOと事前に連携しておけばいいのではないか」ということをちらっとおっしゃいました。私はそれはありだと思います。だから小学校でもいいんですよ。どこかの小学校が、うちの小学校の校区内には障害者・高齢者が多いと思われたのなら、市の方もですね、ここの避難所に障害者・高齢者が集まったときには、どこのNPOさんにこのときは入ってほしいと事前に言っておいて、連携先をそれぞれマッチングしておきます。そして、日ごろから体育祭のときとか何かに来てもらうとか仲良くなっておいたほうがいいのではないかと思います。

介助者は命がけで守るしかないもので、フルで働き続ける可能性はあります。本当は望ましくはないですけども、しょうがないんです。だからそういう可能性に陥るということだけは分かっておいたほうがいいかと思います。けれど、その後、介助者にはボーナスを出してくれる——私はもらっていませんけど、だれかがどこか温泉旅行に招待してくれるとか、そういうことがあるといいかなと思えます。

(6) 個別避難計画

もう一つは避難計画を作っておくことは大事だと思います。今、阿蘇で避難計画を作っているところなんです。避難計画を作って見直しのワークショップを学生とやっています。「私たちは無事です。どこどこにいます。」という紙を使います。助けに来た人が、「ここにいないのはおかしい」と、「ここにじいちゃんが絶対いるはず。でも声が出ないのはおかしい」と「おいおい」と呼び続ける時間があったくないので貼る。だけどこれも実は同じワー

クショップを熊本市内でやったら大反対を受けました。「空き巣に入れと言ってるようなもんじゃないか」と言われました。これは地域性があります。東京では難しいと思います。だけど所沢でやってらっしゃる話を聞いて少し自信がついたので、「大都会の所沢でもやっていたから熊本だったらいいのではないかと」と、もう一回言ってみようかと思えます。

実は個人避難計画を作ることは、内閣府は、「災害時要援護者の避難支援に関する検討会報告書」（平成 25 年 3 月）などで、熊本地震の前に「作りなさい」と言っているんです。でも熊本県の達成率は 10% いていませんでした。

（7）大学で作る障害学生の個人避難計画

学生たちとは震災前に、「大学の 7 階にいたときにどうやって下りるかという具体的な避難計画を作ろう」という課題を、私の授業でやりました（図 20）。障害当事者和其他の 4～5 名のグループを作ってです。まず障害を理解しないといけないんです。先ほど、「これされると嫌とかあれされると嫌というのは、当事者に聞いてください」というコメントがあったと思いますが、障害というのは個別性があるので、まずその体の状態を理解していくことは大事なんです。それは、そのときに障害者だけではなく、その人のボランティアに求めるのではなくて、やはり事前に共有が必要です。

最近の当事者にはびっくりします。最近の障害学生は、子どもの頃は親に抱え上げられてどこかに行くから全くバリアフリーです。中学校、高校は場合によっては支援学校に行っているからバリアフリーです。買い物に行くときにも大型ショッピングセンターに行くからバリアフリーです。一回も階段を抱え上げて下ろしてもらったことが無い学生ばかりだったんです。

それで、抱え上げてもらう練習をしようとして、「はい、指示して」と言ったら指示の仕方が分からないんです。これは障害を持っていない学生の訓練のつもりだったのに障害学生に「あんた自分の体を知って、どういうふうに介助してもらったらいいかを自分で伝えなくてはいけないのよ」と言うことになりました。

フットレストの外れるところを「持て」と言ってみたりとかして。「ちょっと待て」と、「階段に行く前に今そこで持ち上げてみて」と言ったら、案の定外れてがたんと落ちました。「これが階段だったらどうする」ということですね。最初に障害学生に聞いたら、やはり「電動車いすごと下ろしてほしい」と言われたんです。それは学校側がノーでした。でも私も本人にもう一回言いました。「自分の体重は何キロ？ 電動車いすは何キロ？」それも知らなかったんですけども。「足したら 100 キロを超える。0.1 トンだよ。余震が激しいときに、たとえ男子学生が 10 人いたとしても、あそこで階段を下りている途中に、足場が悪いときに余震が来て落ちる可能性がある。」と。「落ちた人間が首の骨を折って死ぬこともあるし、おなかに電動車いすが落ちてきたら内臓が破裂するし、ボランティアの学生が障害者になることだってあるし、障害学生がもっと障害が重くなることだってある」と。そのリスクは負わせられないということで、どうしたらいいかというのを考えて、柔らかいソフトな担架を使うことになりました。取っ手がついていて、それ自体がとても軽いんです。それに本人

を乗せて下ろす練習とかをいろいろやっています。



図 20 障害学生の避難計画

それで結局どうするか。図 21～24 は名前を消してありますが、個別計画です。全部違うんです。「ボランティア募集」と言って、ボランティアが 10 人も 20 人も来てわあわあやっけていても全然進まないんです。だから「何人必要です」と書いてあるんです。先生がその紙を見て、ボランティアが 5 名必要と言ったら「5 名だけ残ってあとの人は早く逃げなさい」と。そして 5 名の人は、どこでどういうふうにはれば安全に持てるか、本人のこの①から⑩までを順番に追っていくと下に降りられるというふうになっています。裏には、下りた後どこに行きたいか、自分の緊急連絡先は誰なのかが書いてあります。

なぜこれをやるかという、言語障害を持っている学生がいっぱいいるからです。言語障害を持っている学生がパニックになったり、それから聞くほうもパニックになっていると、なかなか聞き取れない。それもあって全部紙に書いてます。後ろにかかりつけの先生や、車いすが故障したときの連絡先などいろいろ書いてあって、それも全部個別で違いますが、学生が A4 サイズ 1 枚の紙の表裏のラミネート加工したものを自分の車いすのポケットに入れています。それで、例えば「市役所やどこかデパートなどの上の階にいるときにもし何かあったときには、その紙をその場にいる一番信用できそうな人に、見た目信用できそうな人に渡せ」と。その人がそれを読み上げて行ってくれると下に降りられると。それで荷物を持って行く人なども考えていろいろやっています。これはかなり試行錯誤しました。

【A君 避難計画】

診断名：脳性麻痺に
機能障害：体幹機能障害。不随意運動。筋緊張が強い。


避難支援手順：
①本人またはサポーター学生が教員に本紙を渡す
②教員または本人が学生3名を集める(できれば6名)
③車いすのコントローラーと机を外し、体を抱え、担架に移動し、ベルトで体を固定
※担架の保管位置
※分からない部分は A君に聞いてください

《コントローラー・机の外し方》

- ・ コントローラーは、下のネジを緩め、手前に外し、車いす下のネットに入れる
- ・ 机はコントローラーを外したら、手前に外れる

吉村千恵(熊本)

図 21 車いす利用学生A君の避難計画 概要



④頭を支える人1名と、両側に各1名の合計3名で運ぶ(体重 * Kg)
⑤足側を前に進む(特に、階段を下りるとき)
⑥掛け声は、「いち、に、いち、に」で揃える(持ち上げる時、降ろす時注意)
⑦階段運搬中に余震が起きたら近いほうの踊り場へ？
⑧1階に着いたら、一旦グラウンドへ。地震が落ち着いたらB号館へ移動。
C号館教務課分室近くの階段は、避難に適さないので使用しない

吉村千恵(熊本)

図 22 車いす利用学生B君の避難計画 手順書

【Bさん 避難計画】

- ・ 本人かサポーターがこの用紙を担当教員に渡してください！！

診断名：脳性まひ
機能障害：手足の硬直、不随意運動

- ・ 手足の硬直は抜けるまで時間がかかる(*分程度)。
- ・ 抜けた時は自分で分かって伝えることができるので、それまで待っていてほしい。

※ 担架は* *にあります。

吉村千恵(熊本)

図 23 車いす利用学生B君の避難計画

避難支援手順:

- 1 教員または本人が最低3名を集める。
- 2 担架、パイプ椅子を用意する。
- 3 パイプ椅子に担架を敷き、おしりの位置にベルトを一本通す(ベルトは車椅子の後方)
- 4 正面から車椅子に座る本人の腰を両手で抱えて引き上げる(図1, 2)。
- 5 担架の上に移乗。腕も一緒に緑のベルトで胸部の高さで担架を身体に固定(図3)
- 6 おしり位置に敷いたベルトで身体を固定。
- 7 担架の黄色ベルトを2名が肩にかける
 - ・ Bさんの頭部側を肩にかける
 - ・ 青い持手を持つ
 - ・ 3人目がいれば足元の持ち手を持つ

※11号館教務課分室横の階段は利用しない
 ※電動車椅子は邪魔にならない場所に移動
 フロアにある避難用車椅子とパイプ椅子を持っていく。
 吉村千恵(熊本)

図 24 車いす利用学生B君の避難計画：手順書（下の写真は、(株) ベルカより許可を得て転載）

(8) 行政の役割（避難所もヘルパー派遣先とする、デイサービスの早期開始）

行政の役割について、今回、何が助かったかという、2つあります(図 25)。私は1週間後ぐらいに熊本市役所の人に交渉をしたら、「ヘルパーの訪問先を自宅以外で避難所でも認める」と言ってくれました。すごく助かりました。同じ地域の人たちが来ているので同じヘルパー派遣所のヘルパーが来ている可能性が高いのですが、きょう1時から2時まではAさん、2時から3時までがBさんで、移動のロスがなくなりました。ヘルパーさんは大喜びです。また、隣で様子もわかります。そうすると私たちも助かるんです。やはりどんなに頑張っても、ひとりの人をケアするのはとても大変ですが、1時間でも2時間でも特定の慣れているヘルパーさんが来てくれて、その人のケアをしてくれるということだけで、すごくほっとしました。

二番目に、「デイサービスを早く再開すること」は助かりました。デイサービスが再開できたところから、避難所に迎えに来てもらって、避難所からデイサービスに行ってもらいました。デイサービスでは、入浴、日常を取り戻す、それからおいしいご飯を食べるという避難所でできないことをやってもらいました。行政が「災害時には避難所で介助をしても点数がつく、報酬を出す」「デイケアは早く再開してほしい」と事前に言ってくれるとすごく助かります。

緊急時にはやはり自助が一番なんです。そうすると、日ごろの備えをどうするかを個別に考える。一方、安定期に入ってからどうするかというのは、行政の役割が大きくなってきます。また、緊急時を安定期までもたせるまでの間は、共助がとても大事です。自助・共助・

公助の組み合わせは地域格差もありますし、個人差もありますので、できるだけ多くの人が考えておく、計画を持っておくのが非常に大事だと思います。

③ 行政と「我々」の役割

- ・発災、その瞬間には行政の力はほぼ間に合わない（自助・共助）
- ・しかし、事前の備えは、公助（行政）の力が重要+共助。
避難計画の策定など。これに当事者性をどう反映させるか
- ・避難所運営も、「そこに避難した人たちが協力して自主運営に務める」ことが基本

日頃の備え、安定期に入ってから行政の役割（公助）+
緊急時の仲間・近所・家族などの助け合い（自助・共助）

☆いかに、シミュレーションをし、公・共との事前打ち合わせをしておくか
いかに、自助をシミュレーションしておくか

加えて、地域間連携（被災地以外の地域がいかに被災地を支えるか）も要検討

図 25 行政は事前準備と安定期に力を発揮する

（9）避難所の合理的配慮

合理的配慮というのは、そういうのも含めて合理的配慮です（図 26）。「おいしい食事を食べている、温かい食事を高齢者・障害者だけが食べている」と怒られたことがあるんです。「ここだけぜいたくだ」と。実は、市からの配給の別に、自分たちで食材を調達して、温かい炊き出しをしていたんです。嚥下の障害があったり、認知症の方たちとかは、冷たいおにぎりや冷たい味噌汁ではなかなか元気が出ないんです。そのときに、一見、不平等と思うかもしれない。逆差別と言われるかもしれないのですが、暖かい食事は命と心を守るための必要な配慮だと思います。だからそこは、「合理的配慮とは何なのか」ということを具体的にやっぱり避難所の中に残していくことは必要なことだと思います。合理的配慮と一言で言っても何のことか分からないです。それを具体的に考える必要はあるなと思うんです。

④ 避難所の合理的配慮とは

「スペース」の確保だけでは不十分
緊急時だからこそ、「合理的配慮」は「積極的不安（負担や遠慮も）
解消方法」であるべき

ケア・食事・スペースは、他の避難者よりは一見恵まれていると思うかもしれないが、身体的・精神的体力は同じじゃない。
「平等に」と言って、食事やスペースを制限する必要はない。
日常とちがうからこそ出てくるニーズが必ずある。

災害は平等に來ても、被害は不平等
その解消をするべきなので、遠慮する必要はない。

図 26 避難所の合理的配慮とは

9 その後の熊本（図 27）

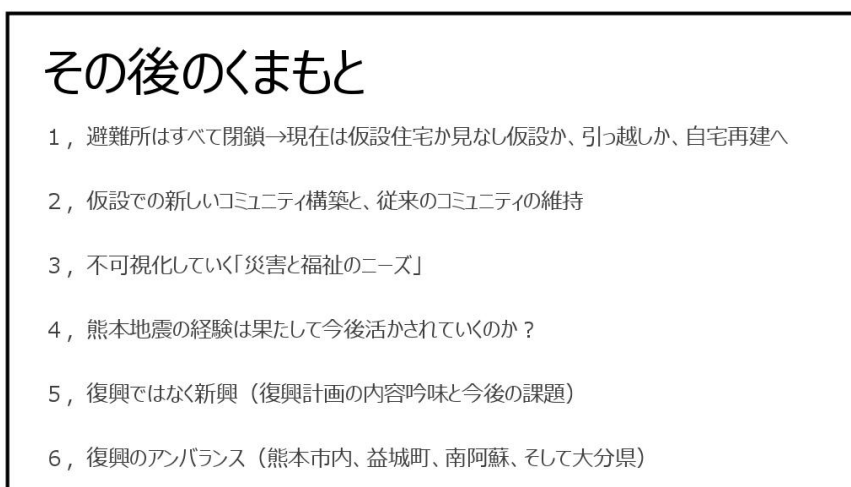


図 27 その後の熊本

2016年11月末に、避難所は全部閉じて仮設住宅に移りました。今（2017年2月）、仮設住宅に新しいコミュニティができつつあります。従来のコミュニティの復活は難しくなっています。ボランティアとして、ある農家と話していて、「最近どうですか？」「最近嫁が元気です」という会話がありました。ずっと同居していて、姑さんとの生活が嫁は嫌だったんです。そして、地震を機に仮設住宅に入るんですが、2世帯に分かれて違う仮設のくじを引いてっちゃったんです。おじいちゃんおばあちゃんは、早く一緒に住みたい、孫とも会いたい。でも、お嫁さんは別れたので元気なんです。もう戻りたくないそうです。すごく元気に仮設住宅を楽しんでいるみたいですね。それが結構あちこちで起こっています。今までどれだけ無理をしてきたかという話なんです。

今まで維持してきた地域のお祭りや行事というのは、復興して集落に戻ると言っても、高齢者夫婦が戻って若い世代が戻らない可能性もあります。そのときにコミュニティは元に戻らないんです。新興、新しい地域づくりをやっていくしかないんですね。その新しい地域づくりをどうするかというところがその5番目ですね。やはり私たちは、新しくもう一回地域づくり、街づくりを考えていかないといけないのかなと。その中にやはり障害者、高齢者の地域社会とは何なのかというところも含めて作っていくしかないのかなと思います。

10 報道のバランスによる支援の格差

もうひとつ言うと、義援金のよりどころや寄付のよりどころなど、報道のバランスにも関係するんですが、かなり格差がありました。ぜひ皆さん熊本や大分を応援してくださるときには平等に義援金を送ってください。今（2017年2月）、阿蘇だけ全然復興が始まっていません。益城はすごくニュースになったので、義援金が届いているので取り壊しがガンガン進んでいます。南阿蘇は、まだ東海大学の学生が亡くなった寮も残っています。出てくる補助

の金額も違います。大分県は、風評被害に近いところがあります。

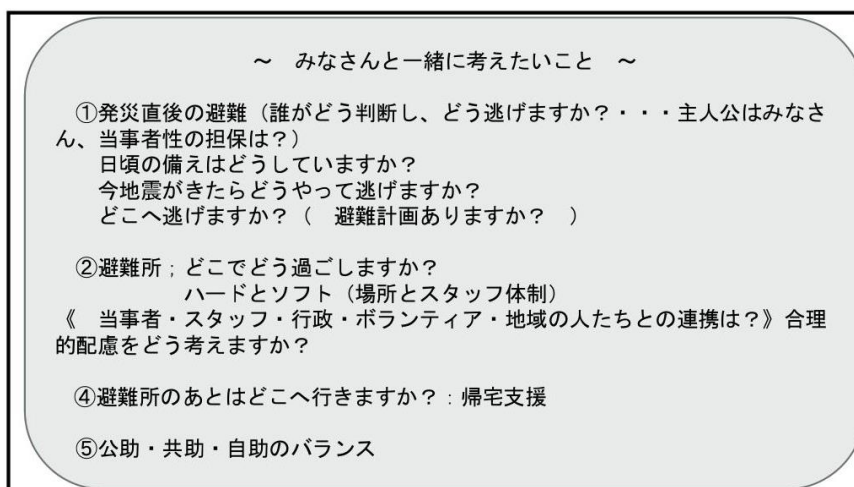


図 28 みなさんと一緒に考えたいこと

やはり日ごろの備えから、避難所の後どうするかというところ、それから公助・共助・自助のバランスというところをぜひ、それは個別差があると思いますので考えてくださったらなと思います (図 28)。

ありがとうございました。(拍手)

【質疑】

北村：どうもありがとうございました。吉村先生のお話は、とても力強く、具体的に皆さんイメージができたのではないかと思います。ご質問はありますか？

広域避難

A：県外に避難した障害者はいましたか？

吉村：県外に避難した方もありました。特に、呼吸器を使っている方は、電気が不安定な家屋もあり、何人か県外に行かれました。県外避難もいいと思います。被災地で大変な思いをして我慢してもらうよりは、安定して安心できます。私は地震の直後にいろいろなことがあって、何回か東京に行ったんですが、離れるとホッとします。特に精神的なことと体がすごくつながっている方とかですね、医療機器が必要な方は、できるならさっさと避難をしてほしいし、事前に打ち合わせされてるといいと思います。「何かあったら受け入れてね」と。ネットワークの中ですね。「逆に何かあったらうちが受け入れるから」みたいなのも一つの準備かなと思います。私は賛成です。思いはいろいろあらわれて、結局、帰って来られる方と帰って来られなかった方がいらっしゃいますが、それはまた後で考えればいいと思います。

避難所の経費

B：重身施設のC療育センターというところで介護士やっていますBと申します。熊本学園大学は福祉避難所ではなかったのはニュース等でお伺いしていたのですが、金銭的な援助も全くなかったのか。例えば、市町村からの後からの指定で金銭的な援助、あと物資的なものがあつたかと思うのですが、そういうものに関してはどうでしょう。

吉村：後で来ました。おかげさまで。ただ、じゃあ赤字か黒字かというところ赤字です。ただ、一応規定に従って、指定避難所としてさかのぼって一応認めていただいて、初日から活動したということで、指定避難所と同じ扱いにしてもらいました。

北村：福祉避難所じゃなくて指定避難所として？

吉村：はい。私たちは福祉避難所のつもりではなかったもので、一般の避難所と同じ扱いで使ったものとかを申請しました。

B：はい、ありがとうございました。

北村：すみません、時間が来てしましまして。たくさんお聞きしたいことがあると思うんですが。この後は、メールなどでご意見などお寄せください。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

